

全国在宅療養支援診療所連絡会 第1回全国大会 プログラム別詳細

タイトル	かかりつけ医が在宅医療を積極的に行うには？－その具体的な方法とは－
日時	平成26年3月23日(日) 13:40～14:40
会場	サブホール(503)
座長	小倉和也 (はちのへファミリークリニック・連絡会世話人)
演者	鈴木央 (鈴木内科医院・連絡会副会長)
企画の趣旨・概要	<p>今後高齢化が進むにつれ、医療体制には変革が必要になると考えられている。現状のままの体制では、都市部では、入院医療が終末期高齢者の入院によって飽和状態となり救急医療体制が崩壊する可能性が考えられる。一方で過疎地域では、人口減少による医療ニーズの低下によって医療機関数がさらに減少する可能性が指摘されている。この打開策として、国は在宅医療推進、地域包括ケアの推進を打ち出している。しかし、在宅医療専門クリニックのみでは地域を面的に隔々までカバーしきれないこと、人生の物語性をより深く知る人間が在宅医療を行うほうが、患者、家族の満足度が高いことなどから、かかりつけ医が在宅医療に参入することが求められている。一方では、かかりつけ医が在宅医療に参入することには様々なハードルがある。緩和ケアから認知症対策、褥瘡と幅広い領域の知識が必要とされるため、今までの専門領域の中ではカバーしきれないこと。24時間365日体制が、一人の医師で運営されている診療所にとって負担が大きいこと、医療の目的が、病気を治し延命をする医療から、時に病気を治し、時には治らない病気や障害があっても医療的支援を行い生活を支えることへ変容することが理解されにくいこと、などがそのハードルとして挙げられる。</p> <p>在宅医療普及への重要な鍵を握るのが、地区医師会の役割である。地区医師会によって行われる、在宅医療研修、診診連携、新たな病診連携体制の確立、多職種による役割分担と情報共有がなされる体制づくり、などの地域事情に応じた在宅医療推進策が極めて重要な意味を持つものと考えられる。特に地区医師会内での医師間のコミュニティが重要であり、共に地域医療を支える意識の共有がきわめて重要であると考えられる。</p>

(敬称略)